



横山大観《雲峰不二》(部分) 1939年 島川美術館蔵

「日本画」「洋画」という言葉は、明治時代から使われるようになりまし。当初は、岩絵具で描かれた伝統的な大和絵や漢画を日本画、油絵具で描かれた陰影をつけた立体的な絵画を洋画として両者を区別しました。しかし、当時から日本画、洋画とは何かという問題が生じ、このことは明確に解決しないまま現在に至っています。

明治大正期の作家たちは、欧化政策、国粹主義、戦争といった世間の動向を注視しながら、自身の主義と表現方法を模索し続けました。近代の日本美術は、西欧から

の美術を積極的に受け入れながら一方では、今までの日本独自の美術を守りつつ更に新たな地平を拓こうとする二つの潮流が交差しながら独自の発展を遂げてきました。

本展では、近代日本美術を代表する横山大観、黒田清輝をはじめ、日本画からは、竹内栖鳳、上村松園、川合玉堂、小倉遊亀らを、洋画からは、岡田三郎助、藤田嗣治、安井曾太郎、岸田劉生など、美術史を華麗に彩った作家を紹介します。さらに、現代画壇を牽引する作家から様々な場面で活躍する俊英たちの作品を幅広く展覧します。

明治から令和に続く作家を、日本画、洋画といったジャンルで対比するのではなく、時代の流れとともに俯瞰することで、日本絵画の魅力を変えて知っていただける機会となれば幸いです。

会期：9月5日(土)～10月21日(水)

※9/14(月)、28(月)、10/12(月)は休館日

会場：企画展示室、常設展示室2・3

観覧料：一般900円(800円)

高校生以下無料、障がい者(介助者1名含む)無料

※()内は20名以上の団体料金、65歳以上の割引料金

関連催し

講演会 (聴講無料)

日時：9月5日(土) 午前11時から

会場：市民アトリエ

講師：立島 恵 氏 (本展監修者、佐藤美術館学芸部長)

定員：40名 要電話申込 (定員になり次第締め切ります)

関連催しの中止や変更が生じる場合があります。
お出かけの際は、ホームページで最新情報をご確認いただくか、
事前にお問合せください。



上村松園《初音図》(部分) 大正末期 光ミュージアム蔵

菊の移ろい

となみ芸術文化友の会会長 谷口 美都江

菊は秋を代表する花で、色とりどりの美しい花が芳香と共に澄んだ大気の中に映えている。中国から伝来し、「キク」は中国語の発音そのまま日本語になっている。伝来の時期については諸説あり、「万葉集」には菊を詠んだ和歌は一首もないが、同じ奈良時代の漢詩集の「懐風藻」には菊が詠まれている。

平安時代になると、最初は薬用であったが花が美しいので観賞用となり、詩歌の題材として詠まれるようになった。この頃は黄菊と白菊であったが、菊の花は日数が経ったり霜や雪に当たったりすると色が褪せて変色する。王朝の人々はそれを枯れと捉えることもあったが、むしろ移ろいの美として受け止め賞美した。咲き始めて盛りとなっている美しさ、その後の移ろいを見せる美しさ、いわば菊は二度おいしい花なのであった。

仁和寺に菊の花めしけると、にんなじ「歌そへて奉れ」とおほせられければ、よみて奉りける たいらのさだぶん 平貞文

秋をおきて時こそありけれ菊の花

移ろふからに色のまされば

(古今和歌集 巻五 秋下)

宇多天皇(867~931年・在位887~897年)は退位した後出家して法皇となり、仁和寺に住んでいた。その宇多法皇が貞文に菊を献上させるとき、和歌を添えるように言ったので詠んだものである。—秋が盛りだとはかり思っていました、秋が過ぎてもなお盛りの時があるのでした。この菊の花は秋が過ぎて色が変わり始めるやいなや、更に美しさを増しているではありませんか—。移ろう菊の花を宇多法皇にたとえて、帝位を去ってもますます栄えているという意味になり、第二の人生を称賛しているようでもある。宇多法皇は天皇在位中の寛平年間に、「寛平御時菊合」を主催している。(次頁へ続く)



また白菊が好まれ、その白菊が移ろう過程で紫色が生じてくる美しさが好まれた。

えんぎ だいご の おおんとききくあわせ たいらのまれよあそん
延喜（醍醐）御時菊合に 平希世朝臣

菊の花霜にうつるとをしみしは
こきむらさきにそむるなりけり
ぎょくよう
(玉葉和歌集 卷五 秋下)



宇多天皇の子の醍醐天皇（885~930年・在位897~930年）は、在位中の延喜年間に「延喜（醍醐）御時菊合」を二回主催した。希世の和歌はその二回目のあるときのものである。—（白）菊の花が霜に当たって色が褪せると惜しんだのは、実はそれは濃い紫色に染めることであったのだ—。

菊を栽培している人に話したら、白菊に紫色が生じて「きれいですよ。」とおっしゃっていた。私は市販の切り花の白菊を花瓶に挿しておいた。しばらくすると、花の中心のあたりに紫色が生じてきた。往時とは菊の種類や紫色の出方も違うであろうが、「白菊が紫色に染まっている」と感動した人の思いを私なりに体験することができた。菊は秋を代表する花と書いたが、現代では一年中見ることができ日持ちも良いので重宝している。その分あまり移ろいに目を向けることもないかも知れない。

見る時期が限られていた昔の人々は、菊の移ろいを美と受け止め、それを和歌や物語に表現したり、前述の貞文のように移ろう菊に和歌や手紙を添えたりして、その移ろいを味わっていた。

また衣服の袷の仕立て方に重ね^{かさ}という重ねとあって、表地から少し裏地が見える仕立て方があり、季節によって名称や色が決められていた。「移菊」という重ねは、表は紫、裏は黄（又は白、又は青 諸説あり）で、晩秋から冬にかけて着用し、季節の変化を敏感に取り入れていた。

そうした昔の人々の、自然に対する感性の豊かさと美意識に改めて思いを深くしている。とっくに移ろい果ててしまった私…であるが。

となみ芸術文化友の会 令和2年度研修旅行について

毎年秋に実施しております「となみ芸術文化友の会 研修旅行」は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を鑑み、会員の皆さまの健康・安全面を第一に考慮した結果、**今年度は中止とさせていただきますことになりました。**楽しみにしていただいていた会員の皆さまには誠に申し訳ございませんが、ご理解賜りますようお願い申し上げます。

砺波市美術館 企画展

となみ野二人展 ワークショップ開催報告

砺波市美術館学芸員 辻 弥生子

香川眞有美先生のワークショップでは、白い木綿のハンカチを輪ゴムでくくり、そこへ好きな色の染料を筆でしみこませていく手軽な絞り染めの技法を教わりました。思うように染まったかどうかは輪ゴムを外してからのお楽しみとなります。参加者の皆さんは一樣にカラフルな和の風情漂う染め体験を満喫したのです。

吉川信一先生のワークショップでは、描画の基本となる石膏デッサンを学びました。専用の道具を使って形を捉える方法や画用紙の中にバランスよく石膏像を収めるコツなど実演を交え教わりました。イーゼル（三脚）にカルトン（画板）を立てかけ、姿勢よく構えて石膏像と画用紙の間に視線を行き来させ、描き始める参加者の皆さん。完成には至りませんでした。基本の重要性を知る好機となった2時間でした。



▲7月25日（土）「染織体験工房 気軽にハンカチ染め」講師：香川 眞有美 氏



▲8月1日（土）「石膏デッサンに挑戦 鉛筆で描く」講師：吉川 信一 氏

砺波市文化会館

コンサートピアノ演奏体験事業実施報告

砺波市文化会館企画係 利波 匡裕

新型コロナウイルス感染症による非常事態宣言が出された影響から、3月以降6月末まで大ホール利用のキャンセルが相次ぎました。こうした中で、音響反射板を設置した本番さながらの大ホールの舞台上、コンサートピアノの最高峰と称される逸品のスタインウェイの表情豊かな音色を実際に体験していただきたいという趣旨で、参加費無料の演奏体験事業を企画しました。



期日は6月20日（土）、21日（日）、27日（土）の3日間。10時から17時まで一日あたり7組の体験募集をしましたところ、早々に受付終了となりました。

演奏体験参加者からは「スタインウェイの響きが素晴らしかった」「ぜひまた体験したい」との声があり、大変好評をいただきました。

コロナ感染症の感染拡大が続く中、今後も「新しい生活様式」に対応した事業を企画し、文化振興を推進していきたいと考えています。